



<h3>あけび蔓細工</h3> <p>江戸時代から、津軽地方には、豊富なあけび蔓や山びょう蔓などの材料を使った様々な編組品があった。編み方は、並編み、こだし編み、グニ編みなど色々あり、その模様も様々である。自然の素材の特長を生かし、温かさを持った美しい編組製品として需要が高く、民芸品としても全国的に高く評価されている。</p> 	<h3>津軽竹籠</h3> <p>東北には「根曲がり竹」という根元の曲がった耐久性に優れた竹がある。「りんこの手かき」として知られる竹細工は、この根曲がり竹で作られ、愛宕地区で生産されている。他産地の竹製品とは異なり、六角目など大まかな編み目で作られ、野趣豊かである。近年ではかこ類を始め、小物入れなどが、民芸品として多くの人々に親しまれている。</p> 	<h3>弘前こけし・木地玩具</h3> <p>津軽系こけしは、黒石市、大鰐町、弘前市で作られたこけしの総称である。明治時代から、津軽地方内の木地師および津軽と他県の木地師との交流が盛んに行われており、弘前こけしは、中でも大鰐郷の流れをくむものとして現在に受け継がれている。また、こけし作りとともにこまやダリマなどの木地玩具も盛んに作られ、地域の人々に愛されている。</p> 
<h3>津軽凧</h3> <p>藩士の手内職として、江戸時代から作られるようになったと言われており、津軽特産のビバ材を使用した骨組に、戸世絵や三国絵、水滸伝等の挿絵をもとにした武者絵を特徴としている。そこには武士の魂が込められており、津軽の風土に育まれ、現在に受け継がれている。</p> 	<h3>錦石</h3> <p>古い室町時代より「陸奥の錦石」として名高い青森の錦石は、碧玉、めゆり、玉髄などの石英に各種金葉イオンが混入したことにより、複雑で格調のある色彩が交錯したものである。現在では、観賞用の美石のほか、指輪、ブローチなどの装飾品として広く活用されている。</p> 	<h3>津軽桐下駄</h3> <p>日本人の履物として古代より用いられてきた下駄は、江戸時代になって広く流行し、津軽においても隆盛を極めた。下駄の材料には桐が最も適しており、軽い・柔らかな・反動が少ない、温度変化が少ないなどの特徴がある。津軽の桐は、木質も堅く、木目も美しい。白木の下駄のほか、雪下駄、津軽塗下駄など、しっとりとした雰囲気を持っている。</p> 
<h3>太鼓</h3> <p>1本の木をくりぬいた胴に馬や牛の皮張りをして仕上げるのもちろんのこと、桶作りの手法を用いた太鼓作りが「ねぶたの地」弘前ならではの製品。直径4メートルの「津軽情こ張り太鼓」も地元で作られている名品である。</p> 	<h3>金魚ねぶた</h3> <p>津軽の祭りに欠かせることのできる夏の風物詩「金魚ねぶた」弘前ねぶたは、1722(享保7年)に初めて文献に登場して以来、様々な形のねぶたが時代を彩ってきた。江戸時代、金魚は一部の上流階級の間でしか飼うことのできた高級魚であった。それをねぶたにして子供たちに祭りのおしるし、提灯のように持たせ継り歩たたとされる。「金魚」はその名の通り金運をもたらす幸福を呼び継紀物として長きに亘り、廃れず今も市民に親しまれている馴染み深い江戸芸である。</p> 	<h3>津軽伝統組子</h3> <p>津軽伝統組子は、飛鳥時代から約1300年以上続く建築物の装飾として受け継がれている組子の一種。細く挽いた木に溝や穴、ホゾを彫り、直線的ななくつもの形のパーツを組み合わせることで、立体的で複雑な幾何学模様を描くことが特長である。その技法は多岐にわたり、屋内装飾、行燈、衝立、屏風、球体のランプシェード、バッグなど幅広い製品を作り出すことができる。</p> 

